



平成30年度国立市市民表彰 教育文化功労 佐野佳代氏

～美術は“総合人間学”～

一くにたちギャラリーネットワークを始めたきっかけを教えてください。

多摩地域が神奈川県より東京府に移管され100年目にあたる平成5年、市の「TAMAらいふ21」の記念事業の一環として、「多摩女性美術101くにたち展」が開催されました。

21世紀の多摩のまちづくりを目的として、女性作家の作品を一堂に会した画期的なイベントに、当時在籍する10余りの画廊が会場を提供し、展覧会が同時に開催されました。これを契機に協力の輪が広がり「くにたちギャラリーネットワーク」の活動が始まりました。以来、26年の歳月が経過する中で、多くの画廊が誕生し、それぞれ独自のポリシーのもとに、文化芸術を育む活動を展開しております。

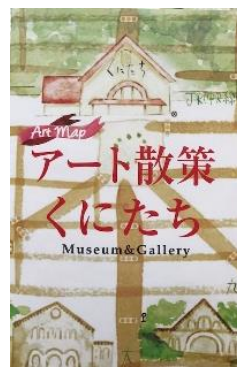
一くにたちギャラリーネットワークの活動内容を教えてください。

まず、役割の根幹として美術講座を展開し、学ぶこと、そして、そのことを鑑賞することとしての美術館巡りの二つを軸としました。1回目は、地元を知ることとして、彫刻家関頑亭先生による「くにたちの街と芸術運動に始まり、中澤富士雄氏の「やきものの歴史 景德鎮と備前陶磁」、窪島誠一郎氏の「二つの美術館のこと」、千石信行氏「描かれた女性像」、福山元誠氏、遠藤勝齋氏「能面展と能の実演」、山口桂三郎氏「葛飾北斎」、中村隆夫氏「モナリザにレオナルド・ダ・ヴィンチの心」など、16回の講演を開催。美術館巡りは、近隣から足利市「栗田美術館」へと19の美術館巡りを実施。

この二つの活動は市民の皆様の楽しいイベントとなりました。しかし、路線バス事故が多発する中、美術館巡りを断念し、設立25周年記念として美術ジャーナリスト齊藤陽一氏による連続美術講演会を開催し、印象派のニッポン、ルネサンス絵画、琳派の美意識に続き、今年5月より、シリーズ3回公演「魅惑の世紀末絵画」、「ロートレック、モンマルトルの哀愁」、「クリムト～世紀末ウィーンの光芒～」、「ムンク～北欧・魂の叫び」を予定しております。

一活動している中で、印象的だったことはありますか。

設立10周年記念イベントとして、文楽の魅力を身近に感じていただくため、吉田蓼太郎氏（現在、三代桐竹勘十郎）一座による文楽公演をくにたち芸術小ホールにて開催したことは市民に驚かれるニュースとなりました。



一今後の展望を教えてください。

国立に在籍する14の画廊とたましん歴史・美術館、くにたち市民芸小ホール、くにたち郷土文化館がよきネットワークを持てたら、美術の情報を発信し、文化の土壌のある国立の発展に寄与することができればと願います。

連続美術講座開催の講師、齊藤陽一氏言葉を紹介します。美術史を勉強することの面白さは、人間の創造力の多様さを知り、人間というものの幅の広さを知ることにあります。それは、現代に生きる私たちにも多くの示唆を与えてくれます。美術の勉強は、“総合人間学”というべきものであり、その奥の深さと面白さの一端を伝えたいと思います。

一国立市に期待していることはありますか。

それぞれの地域にある街とは、その街が生まれ持った土壌があると思います。発展するために、根元にある可能性を引き出し、大切に育てることが発展への近道とっております。

現市政もよくご努力をなさっていらっしゃることに敬意を表しております。